

2011年度森泰吉郎記念研究振興基金研究者育成費成果報告書
知的障害者のライフステージごとの支援方策の研究

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科
小幡 浩之

知的障害者の生活・居住支援は施設中心から地域・家庭生活中心へと転換し、今では地域・家庭生活を営む知的障害者数は増えてきている。しかし、その実態は家族一特に母親が自分の身体の限界が来るまでケアをしていることであった。

本研究は母親がすべてを抱え込むことが知的障害者本人の生活に支障をきたす原因と捉え、母親がいなくても生活できるようにするため、円滑に入所施設へと暮らしの場を移行する方策を探るものである。

そのために筆者は、すべてを抱えている母親がケアをできなくなった時に本人の QOL が短期的または、中長期的に低下してしまう「親亡き後問題」を整理し、知的障害者本人と家族の関係を考察した。その中で、親亡き後も知的障害者と同じ時代を生きるきょうだいにインタビュー調査を行い、母親がケアのすべてを担っている現状とそれに対してのきょうだいたちの立場を明確化した。

続いて、すでに入所施設へと暮らしの場を移した知的障害者とその関係者に入所以外の選択肢はなかったのか、入所にあたってどのような点において困難が生じたのか、インタビュー調査で明らかにした。そこで、入所は取らざるを得ない選択肢であること、長年親子で一緒にいることによる対応力の欠如と、入所後は施設がケアのほぼすべてを行うことの2点が課題として示された。取らざるを得ない施設入所を円滑に行うために課題に対して「長期的移行」「移行チームの結成」の2つの解決法を提示し、その有効性を検証した。

最終的に、今までの知的障害者本人、母親、きょうだい、施設の関係性を再考し、知的障害者本人同士、母親同士、きょうだい同士が新たな関係性を構築することは知的障害者ケアの分野だけではなく、当事者を取り巻く関係者全員に有益である。